



発行

(財)東京都教育文化財団  
東京都埋蔵文化財センター  
〒206 東京都多摩市落合  
1-14-2

☎ 0423-73-5296

平成7年10月31日

# たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No. 35 平成7年10月31日



板橋区菅原神社台地上遺跡

弥生時代後期の200軒を越す住居跡から出土した、壺、甕、高坏などの代表的な土器の組合せ

## センター創立15周年

所長 石井 則孝

本年は、多摩ニュータウン遺跡の発掘を開始して30周年、センターを創立して15周年という記念すべき年である。

30万都市建設のため、3千ヘクタールの丘陵の、約1千箇所の遺跡を調査してきた。発掘はあと数年で終了するが、丘陵の全体を隈なく調査した例は世界広しといえない。

この発掘成果については、展示、講演、図録、報告書等を通して発表し、今は総合的なまとめに向けて、日夜、整理作業に努めているところである。

多摩丘陵の発掘を通してヒトと自然の係わりから、狩猟・採集・定住・生産・供給・交換・消費という人間生活の根幹をなす情報が得られたのである。

大きな発見を振り返ると、5万年前を遡る南関東最古の旧石器、縄文時代から平安時代のひとたちの粘土採掘坑、9千基に達する縄文時代の陥し穴等。中でも陥し穴に覆いと穴の底に刺しこまれた篠竹が、当時のままで現れたとき、これこそ狩猟法の原点を知った喜びだった。

また、最古の土器や仮面状土製品などの発見も忘れられない。

今も残る丘陵の尾根を走る通称戦車道路こそ、原始・古代の「かもしかみち」であったということができよう。

### 遺跡だより ④④



粘土採掘坑から出土した土器の接合  
——No.248・245遺跡——

No.245およびNo.248遺跡は京王相模原線・多摩境駅の近くにあり、直線で250mほどの至近距離にあります。多摩丘陵南端の斜面、町田市小山地区に位置しており、前方には境川を挟んで相模野台地が広がっています。遺跡は南大沢から町田街道に向かうニュータウン道路の、トンネルを抜けたすぐ右手にあったのですが、いまは発掘当時の面影もありません。No.245遺跡の調査は平成元年から2年にかけて行われ、縄文時代中期・後期のムラが発掘されました。また、No.248遺跡の調査は平成2年に行われ、全国でもきわめて珍しい、縄文土器を作るための粘土を、多量に採掘した跡が発掘されました(写真)。

この調査で、No.245遺跡の一部の住居跡の床から粘土塊が出土したこと

から、No.248遺跡との関連性が関心事になっていました。

そして最近、遺物を整理している内に、ついに両遺跡を結び付ける有力な証拠が見つかったのです。

それは、それぞれの遺跡から出土した、縄文時代中期中頃(約4千5百年前)の浅鉢形土器の破片どうしが接合したのです。

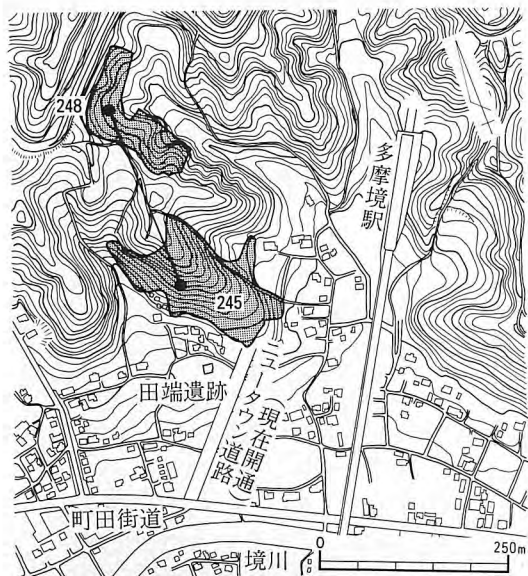
今回の成果により、両遺跡を人びとが行き来していたこと、具体的には、当時ムラに住んでいた人が、No.248遺跡で粘土を採掘してきて土器を作っていた可能性が、いちだんと高くなりました。その一方で、それではなぜ250mも離れて同じ土器の破片が出土したのだろうか、という疑問もわいてきました。

これまでに、遺跡間で遺物が接合した事例が、旧石器時代の宮城県や埼玉県、長野県で報告されていますが、縄文時代の遺跡間での接合例は初めてのことでしょう。

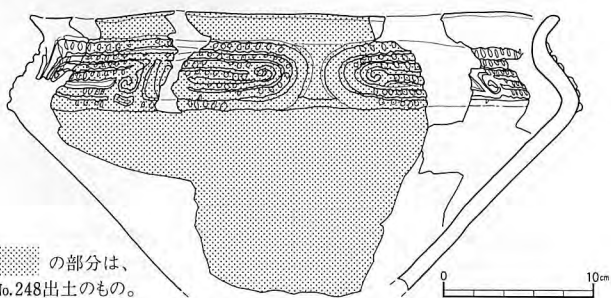
石器の場合、使っていて途中で壊れたらムラに持ちかえって作り変えることは考えられますが、土器は壊れたら使い物になりません。

おそらく、採掘する粘土を運んでくるために持っていた浅鉢を、うっかり落として壊してしまったのでしょうか、どうして一部の破片だけをムラに持ち帰ったのでしょうか。

(山本孝司)



遺跡の位置と接合した土器の出土地点(●が出土地点)



の部分は、No.248出土のもの。他は、No.245出土。

接合した「浅鉢形土器」(実大の1/5)

### ▽国際シンポジウム△

#### 『東アジア・極東の土器の起源』

— 縄文文化の源流を探る —

9月30日・10月1日の両日、東北福祉大学において標記のテーマでシンポジウムが開催されました。

パネラーは、ロシア科学アカデミーシベリア支部からデレビヤンコ所長をはじめ8名、中華人民共和国2名、韓国・アメリカ各1名、日本6名の大規模の陣容であり、発表内容も各地における最古の土器・それに伴う石器の年代など、近年新しく発見された資料が紹介されました。

また、梶原洋研究室とロシア科学アカデミーシベリア支部の共同調査で得られたウスチノフカ3と6遺跡の有孔土器・尖頭器、アムール河流域のグロマトウハ、ウスチ・ウリマ、ガーシヤなど著名な遺跡の土器・石器が公開展示されました。

かねて、縄文土器は世界最古といわれてきましたが、東アジア・極東地域には、年代測定法により約1万3〜4千年前に土器が現れていたことが確認されました。これらの土器は、更新生から完新生への温暖化に伴って出現したようです。それらは縄文世界とどのような距離があるのでしょうか。

(館野 孝)

江戸の造成と低地の大名藩邸

天正十八(1590)年に徳川家康が入府して以降、諸大名に江戸城の築造をはじめ堀・運河の開削、それに低地の埋め立てなどの大規模な天下普請が課せられ、寛永十三(1636)年の頃になりますと、都市江戸としての様相が整ってまいりました。ことに当初の海岸の景観も、「我が庵は 松原つづき海近き 富士の高根を軒端にぞ見る」と詠まれていたものが、文禄元(1592)年の西の丸造成と並行して「日比谷入江」が埋め立てられました。慶長八(1603)年には、駿河台から御茶の水にかけてあった「神田山」が切り崩され、銀座から日本橋の一带が埋め立てられて、往時の面影も失われてしまったことでしょう。

文化財講座 <25>  
大江戸掘りもの帖 ~其式~

そして江戸城を中心に、武家地、寺社地、町人地などが計画的に配置されました。とくに武家地の面積は江戸城の防衛と大名の江戸住まいの確保から、日比谷入江の跡地など、広域な範囲が割り当てられました。ここ汐留地区の遺跡も、江戸湾岸を三藩が拝領して埋め立て造成した



脇坂家屋敷拡張に伴う土留め石垣。北(左)から南(右)に埋め立てが進んだ。

もので、その造成工事の実態が発掘調査で明らかになってきました。

銀座側にある脇坂・伊達藩邸地区の基盤層(東京層と呼ばれる洪積層)は、海拔マイナス1mで認められます。かつて本郷台から南に延びていた日本橋台が縄文海進で浸食された様相を示し(「本誌」34号参照)、これが日比谷入江の埋め立てにより姿を消した「江戸前島」(半島状の砂州)の形成に、重要な役割を果たしたと考えられます。

両藩邸は、この江戸前島の一部を占有して屋敷地が造成されたようです。造成にあたっては、土留めの杭・板を用いて大規模な地盤改良および埋め立て工事を行っています。いっぽう南側を占有する会津藩邸は、基盤層が南に下がって行くことから、ほぼ日比谷入江の開口部を埋め立てて敷地になっているものと予想されます。(石崎俊哉)

遺跡庭園の四季 (二)

八月二十五日に「縄文土器焼き」を行いました。焦げるような炎天下、しかも焚き火穴を三ヶ所も設けたものですから、火の調節に掛かりきりの担当者は脱水症状を起こし、すっかり疲弊してしまいました。炎が人の背丈よりも高く上がり、熱風に炙られたトチ、ヤチグモはやがて褐色の葉を落として枝が丸坊主。てっきり枯れてしまったものとお胸が痛みました。九月半ばになったら、なんと若芽が萌え出てきました。樹木の生命力を知りました。



いま雑穀畑は秋ソバとシコクビエ、エゴマの刈り取りを残すだけになりました。それにしても雑穀は早いものですね。

アワ・キビは例年よりも見事に稔り、重く頭を垂れました。昨年までは野鳥の会から表彰されてもおかしくないほど貢献してきましたが、今年には二重にネットを張って防御しました。何しろ昨年はネットから侵入した小鳥の群れに、収穫まぎわのアワ、キビがごとごとく食べられました。一度、逃げそびれて網に掛かったヒワを捕まえたところ、わたしの掌を必死に嘴で突つき抵抗するのです。思いがけない小さなヒワの命に、しばし見とれたものでした。

クリ・クルミが落ち始めました。そろそろハタケシメジも顔を出すことでしよう。秋霖の候、くれぐれもご自愛ください。(安孫子)

▼展示資料の出品 ▲

錦秋の候、全国各地の博物館では、文化財関係の特別展がたけなわです。当センターの資料も引く手あまたで、左記の展覧会に貸し出し中です。機会があればお出かけください。

- ・八雲立つ風土記丘資料館「再現―縄文の世界―」

- ・福岡市博物館「縄文―自然とともに生きた人々―」
- ・栃木県立博物館「東国火葬事始―古代人の生と死―」
- ・しもつけ風土記丘「古代の集落」
- ・房総風土記丘「住まいと集落」
- ・葛飾区郷土と天文の博物館「発掘最前線―葛飾の遺跡展―」

日の出分室の現地説明会

八月五日(土)午後一時から三吉野遺跡群の現地説明会を行いました。三十度をはるかに越す日照りつづきの過酷な日程でしたから、希望者も二の足を踏むのではと危ぶまれましたが、県外の見学者も含め、参加者は250名の多くを数えました。

馬牧に関係するらしい遺構や住居の竈を模式的に復元したり、実際の発掘作業を背景にしながら、調査担当者が懇切に解説する試みが新鮮と、なかなかの評判でした。



今年の第2回文化財講座

九月九日(土)に、市川市立市川考古学博物館副館長の堀越正行氏による「貝塚から見た縄文人の食生活」の講演が行われました。

堀越氏は、東京湾岸の外海系から内湾系、汽水系そして淡水系について、貝と魚の種類や内容が異なっていく貝塚の実態と、貝塚から得られる情報量の豊かさを整理して、分かりやすく解説されました。

とくに、海辺の人びとも動物性タンパクより植物質食料を多く摂取していることや、貝塚が海岸線からかなり内側に位置するなどの意外な話に、140名もの大勢の受講者が魅了されました。

併せて、映画「甦る古代」を上映。

縄文土器作り教室

八月二日(水)・三日(木)に、大勢の受講希望者のなかから抽選で選ばれた38名が土器作りに挑戦し、三週間の乾燥を経て二十五日(金)に野焼きを行いました。当日は無風で炎天下の最中、三ヶ所の焼成穴を設けての大熱演に、土器は見事に焼き上がりましたが、炎の熱風にまかれて担当者はすっかりグロッキー。縄文土器による煮炊きの試み(ハマグリ吸い物・ジャガイモ塩茹で)も実に美味しくて、好評でした。

海外研修

第2回目の全国埋蔵文化財法人連絡協議会・関東ブロック海外研修が、九月二十一日から二十六日まで行われ、昨年に引き続き中国の北京、西安の社会科学院考古研究所などを視察してきました。参加者は、前山孝雄施設係長、千葉基次調査係長、甲崎光彦副主任調査研究員の3名。

分室だより

市ヶ谷分室 東御殿の表玄関の一部にあたる30地点の調査で、玉砂利が敷きつめられたお白州跡や玄関の柱跡が検出されている。同じ場所でも回も立て替えが行われている。

西国分寺分室 南北に一直線に延びる幅14mの東山道の跡が、隣接する調査会の調査分をいれて約400mにわたって検出されている。空撮を終えて、これから下層の調査にかかる。



道路は、溝で両側が区画されており、中央が硬化している。

日の出分室 周りの栗林も収穫が終わり、一面のイガの絨毯に秋の深まりが感じられます。調査も順調に進み、牧関連の溝が、新たに調査区東端から発見され、さらに東に延びていることが判明しました。

板橋分室 昨年12月に発掘調査を終了し、報告書作成に向けて整理作業を行っている。弥生土器・縄文土器の復元をほぼ終えて、約1千個体の実測を目指し、日夜努力中。

汐留分室 奥州仙台藩伊達家屋敷跡と藩州龍野藩脇坂家屋敷跡の2地点を、引き続き調査しています。なお、11月18日(土) 11時から15時の時間帯で、発掘調査の現地説明会を催します。皆さんの参加をお待ちします。